

折々の銘 【顔回】 がんくわい(その1)

世の秀才に対し「一を聞いて十を知る」という賛辞を呈することがあります。

この言葉は孔子(B. C. 551 - 479)の高弟 顔回に対する『論語』公冶長第五の一節に始まります。

(以下、『論語』口語訳は筆者による)

・孔子が弟子の子貢に言いました「お前と顔回とどちらが優れているだろうか」

子貢は「私は顔回には及びません。彼は一を聞いて十を知りますが、私は一を聞いてせいぜい二がわかる程度です」と答えました。

すると孔子は「なるほど。実は、私もお前同様に顔回には及ばないのだ」と言われました。

顔回(B. C. 514-483)は魯国の人。姓は顔、名は回、字は子淵、したがって顔淵ともいわれます。

孔子とは37歳の年齢の差がありますが、顔回は31歳にて孔子より先に夭折しています。(年齢に関しては他説あり)

顔回を高く評価し、ことのほか可愛がっていた孔子は彼を失ったとき取り乱して泣き崩れたといっています。孔子はこれより2年前に息子の鯉を失っています。相次ぐ後継者の死に御歳70歳に近づいた孔子はさぞや辛かったことでしょう。

春秋時代(B. C. 770 - 403)、孔門(孔子一門)は乱れた世の秩序をとり戻そうと周礼(周時代の身分秩序に基づく儀礼)の復活を主張し、宮廷の儀式から庶民の冠婚葬祭までを司った巫祝集団でした。

しかしながら当時は下剋上の時代であり、古い身分秩序を守ろうとする実力者など居らず、孔門は仕官が難しかったようです。

時代に恵まれれば、孔子や顔回は、名宰相となっていたことでしょう。

・孔子が言われました「顔回に一日中講義をしても、彼は何の異論も唱えない。まるで話を理解できない愚者のようだ。しかし、日常生活を見ると、私の言ったことを十分に理解した生活をしている。彼は愚かではない」(為政第二)

この様子から顔回は派手な言動を好む人物ではなく、ひたすら不言実行に徹した人であったことが想像できます。

さらに、彼の清貧な生活態度は侘茶人に通じる精神を思わせます。

・孔子が言われました「賢いものだよ顔回は。一碗の飯と瓢一杯の水に甘んじ、粗末な家に住み、質素な生活をしている。俗人ならば不満を漏らすところ、彼は無欲で正道を楽しみ改めようとはしない」(雍也第六)

釈迦十大弟子はもとより、このように孔門十哲も聖人の弟子たちは皆秀才揃いですね。

それに比べ、なぜキリストの弟子達は出来が悪いのでしょうか。

彼らは少なくともキリストの生前には師を理解しておらず、師からも信頼されていない。中にはキリストが本当に神の子なのか疑い、試そうと裏切る者まで出る始末です。

弟子達のこの極端な違いは何を意味しているのでしょうか。

そのヒントになるかもしれない一文が『新約聖書』の中にありました。

「人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それなのに神は知者を辱めるために、この世の愚かな者を選び、強い者を辱めるために、弱い者を選び、有力な者を無力にするために、この世で身分の低いもの、すなわち無きに等しい者をあえて選ばれたのである」

『コリント人への第一の手紙 第一章』より

難しいことはわかりませんが、要するに神様は愚か者がお好きということなのでしょう。

それに対し生身の人間から悟りを開いたガウタマ・シッダールタ(釈迦)や人としての生活の規範を説いた孔子は、自ら歩んできた道を弟子達にも要求する以上、弟子達はそれなりに優秀でなければ勤まらなかったのではないのでしょうか。

私のような到底悟りきれない凡人を対象に、仏教が救済を始めるようになるには釈迦入滅後数世紀を経て、凡人は悟ることなど出来ないから、せめて悟を開いた菩薩や如来を慕って生きていきなさいと教えるようになった大乘仏教の時代まで待たなければならなかったのです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~